

金澤詩人



第13号
2017

金澤詩人第十三号目次

青柳理沙	大阪	四
藍森 翔	山形	六
赤木祐子	神奈川	十
阿部静雄	ニューヨーク	十三
飯塚彩夏	神奈川	三十三
上田康宏	奈良	三十四
江口久路	京都	三十八
鋤子ふたみ	東京	四十
冠 ゆき	フランス	四十一
君影港	神奈川	四十三
後藤 順	岐阜	四十五
早乙女れん	石川	四十九
末永卓哉	宮城	五十五
塚本正治	大阪	六十四
蛭間慶美	東京	六十六
みかん	福井	七十二
宮下葉子	長野	七十三
近岡 礼	富山	七十四

青柳理沙

土浦

私たちは、父の最期の場所に帰って来た。父の記憶は私の中にしかない。私の中の記憶が無くなる前にと降り立った土浦駅に、六十年前のあの頃の景色は探しようもないのだが、霞ヶ浦を渡って吹く風の冷たさは、身体の何処かが憶えている。

三才の弟と三方月の妹は、其々親戚に預けられていた。土浦での父は殆んど入院していて、父の具合が悪くなる時、小学一年生の私は大家さんの家でご飯を食べ、お風呂に入れてもらい、泊まらせて頂いた。一度、お正月に父が退院してきた。朝、雨戸を開けると一面の銀世界。父がお盆の上で雪ウサギを作ってくれた。雪ウサギの赤い眼は庭の隅の南天の実で、朝日にキラキラ輝いていた。

父が入院していた国立霞ヶ浦病院は国立霞ヶ浦センターと名前が変わり、病院入口へと続く緩やかな坂はあるのだが、すぐ向かい側にあった小学校が遠くに移動して、小学校の横には高速道路が走り、すっかり様子が違う。病院と小学校の間の広い一本道の右手に中学校、左手に澱粉工場、その裏が大家さんの家で、広い庭の片隅の一軒家に私たちは住んでいた。六十年前の様子を知る人は見つからない。私たちは中学校を目指し畦道に咲く花の名前を言い合いながら歩く。道がL字に曲がり、その先を曲がった時、私の前に見覚えのある懐かしい真っ直ぐに続く一本道が現われた。右手のただっ広い敷地のJR貨物置場の門の入口に張り付けられたマイルに「下高津小学校旧校舎跡地創立130周年記念」。左手に緩やかな坂があり、坂の上には古いどつしりとした石の門が。門柱には掠れてはいるが「国立霞ヶ浦病院」の文字が読める。門の左には守衛さんが一人だけ入れる小屋もそのまま。病院の建物

は取り払われ手入れをされない儘の庭には桜の木が、あつ、崩れかけた藤棚も見える。

私は学校が終わると、小学校の向かいの病院の門から母が出て来るのを、今か今かと待っていた。ある日、入院していたお姉さんが私を手招きして、自分の病室で遊んでくれた。そのことを知った父は、いろいろな病気の人がいる病室に私を連れて行ったことを激怒した。父から叱責されたお姉さんは、藤棚の下で泣いていた。それ以来、私は小学校の庭で母を待ち、木造校舎の壁に掛った時計が五時になると一人で大家さんの家に帰る。そんな話をしながら歩いていると、晴れた空からふわふわとやわらかい雪が降りて来た。私たちは六十年ぶりに土浦の空を見上げた。

あの日も雪が降ってきました五時になっても病院の門から出てこない母を思いながら降り続く雪の道を歩いていました夕暮れの本道は擦れ違う人もなく雪は私の周りに白い壁を作ります雪の中から靴ではなく黒い足袋を履いた男の人が二人現われて中学校はどこかと尋ねます私は本道を右に曲がり中学校の体育館まで案内しました

暗転

ここで私の記憶が消えます次のシーンで私は雪の中を走ります元来た本道を横切って目の前の農家の木の扉を叩きます木の扉が横に動き私は雪と一緒に倒れ込みます

暗転

ここでまた記憶が消えます

探し求めた大家さんの庭では、南天が六十年前と同じ場所で私たちを待っていた。

藍森 翔

お父さん

元来父親は選べないものだった
しかしわたしは自分で選べる父を得てしまった
ドイツには二度暮らしたが、最初に訪れた時に定着地
点まで旅をしてケルンに寄った
大聖堂

目の前のそれは、麓から岩山を見上げるようだった
心をそこに残し、パリ周りで、フライブルク郊外に落
ち着いた

各駅で四つめのデンツリンゲンという町は、列車が近
づくにつれ、桃源郷のような姿をあらわしてくる

それはアウトバーンでフライブルクから接近する時も
同じで、アーモンドの花咲く頃は、日本の桜の季節と
似た光景だ

そしてドイツの桜は色が濃く桜んぼがなる

或る日大家の奥さんが嘆息混じりに言った

ほんとうはケルンに憧れてるけど、あそこの婦人たちは
毛皮を着てる
生活レベルが違うのよ
あれ、そうだったかな

ワールドカップが日韓を会場とした年には、ドイツ対
ブラジルの決勝の日に、大家の旦那に呼びつけられ、
応接間のテレビの前のソファに座らされ言われた

「今日お前はドイツ人としてドイツを応援しなければ
ならない」

結果、ブラジルのシュートの雨あられを防ぎきれなかつた
オリアカーンが、ゴールにもたれて立ち上がれない

旦那は言った「すべてが終わった」

ビールのソムリエとわたしが呼ぶ旦那の、天下一品の
泡をいただく

ドイツ人として、やけ酒のおつきあい
そして言われる

「四年後は会場がドイツだ」

お前は再び、ここでドイツを応援しなければならぬ
そう思ったが、ぎりぎりアウトで五年後、今度は
ケルンにやってくる

大家の奥さんの言葉を思い起こしながら庶民的に生活
し、アドベントにクリスマスカードを国内から送る

年内に返事がこなかった

日本では国際郵便でやり取りしてたのに
年明けてやっと返信くる

なんと、昨年初夏に、大家の旦那が急逝とある
痛恨

そしてわたしはケルン大聖堂と心の交流を始めた
市内の随所からその双子尖塔が覗け、ケルン中央駅前
にそびえ立つそれの中に入り込んで祈りを捧げた
いつしかわたしは心に彼をお父さんと呼ぶようになって
た

長女は日本に残り、ミッシヨンスクールで寮生活
次女は根性者で、ギムナジウムの正規クラスに入った
それで、かつて自分も参加したデンツリンゲンの聖歌
隊のコンサートを、次女と聴きに行くことにした
宿は大家宅のゲストルーム

数泊して、奥さんからもらったチケットで、周辺の懐
かしい黒い森観光も兼ねた

この頃から次女は疲れやすくなっており、ケルンに戻
って間もなく、ギムナジウムの体育教師の指導でクリ
ニックに行き、白血病が発覚した

そして一年半の間、化学療法や骨髄移植を受けながら、
体を消耗し尽くした次女は、多臓器不全で亡くなった

周囲の識者の話をまとめると、化学療法を受けなけれ
ば、数カ月の命だったと聞いた
しかし次女自身は、化学療法について、非人道的な治
療法と苦笑交じりに言っていた
要するに、周囲の人間に心の準備をさせるために、苦
しい目に合いながら、今生の時を引き伸ばしただけだ
ったことが見えてきた

ドイツの葬儀は通例墓地で行われるが、わたしたちは
牧師一家だったため、教会の厚意で、教会葬儀が執り
行われた

ギムナジウムで、教師や校長の尊敬を集めていた次女
に相応しい式だった
その数カ月後に帰国を控え、帰国の引越し準備と次
女の遺品整理が重なり、彼女の荷物のひとつひとつを
手に取りながら、気が遠くなり、失神しそうな思いを
抑え込んだ

デュッセルドルフの領事館で、彼女の遺灰を証明書と
共にパッキングし、出発前夜は中央駅内のホテルに部
屋を取った
つまり、お父さんがこちらを見下ろしていた

次女の闘病中、ケルンの病室のテラスからも見えたし、次女の洗濯物を持って家と往復する時も、そこかしこからその姿が見えた

あの姿が当たり前のように見えた日常生活が終わる

わたしは遺灰を、窓際に置いて寝た

次女自身は翼を得て、大聖堂の周りをひらひら蝶のように飛んでいたかもしれない

翌朝、ICE出発時刻前まで、わたしは次女（の遺灰）といっしょに、お父さんへの最後のあいさつに向かった

すると、人だかり

年に一度の春の行事が始まるようだった

人が溢れて立ち見になっている中、わたしは一人分の

空席を見つけて滑り込んだ

礼拝席の最終列、通路側

石の大聖堂に鐘の音が鳴り響き、壮麗な僧の行列が続いた

通路側だったので、視界をさえぎるものがなかった
行列の間中、天国から降り注ぐようなパイプオルガンの反響

聖歌隊の唱和

わたしはことの次第を理解し、泣きべそをかい

お父さんが、見送りをしてくれている

行列が終わって、チェックアウト時間が迫り、わたしは席を離れた

目の前に若い神父が立っていた

わたしは次女の遺灰を指差して言った

「これ、わたしの娘なの」

わたしの半べそ状態を見て、同情の頷きを授かる

駅のホームからはドーム（大聖堂）の腹の部分が目の前だ

滑り出すICE

ライン川を超える鉄橋から、離れゆくドームを見送る

ケルンに来た時は、逆のベクトルだった

嗚呼、ケルン、美しの都

しかし、それで終わらなかった

次女のギムナジウムの友人の母親とフェイスブックでつながり、彼女はギムナジウムの皆が次女を忘れられないでいると言い

わたしは、次女はわたしの守護天使になったが、そちらの皆さんも守るだろうと応じ

更には、大聖堂のフェイスブックページやツイッターやインスタグラムのアカウントとつながり、毎日それぞれの投稿にいいね！を押す日々だ

果たしてわたしのお父さんは、わたしを手放さなかつた

赤木祐子

書物忌

枕元にどんな本を積んで
毎晩何を読んでいたのか
生きている間に
訊いておけばよかった

子供は生活すべてを
自分の技量ではこなせず
大人を仰いで
懇願したり反抗したりで
毎日もどかしく忙しく
結局何もできないのだ
失語症になり
読書をしなくなり
どこかの路傍に
言葉も誇りも忘れ去り
優越する妻にへつらい

ありがとうと言って
私の知らないベッドで
死んでいった父

幼い私の前に開き
読み聞かせて刷り込んだ
私の親は本だった
私が五歳になるまでに
彼は遺言を済ませていた

ある日付

君が名前を呼ばれるのは
不吉な知らせがあるとき
よく晴れた五月九日
学校に行っている間に
子供部屋が火事になった

君は繰り返し
食堂で箸を落とし
居間の隅で耳を塞ぎ
脱衣所で震え
煤けた部屋に戻っていく

ハンモック

終わらせたくて
終わりそうで
終わらない
食べたくなくても
食べられなくても
ちやんと食べる
眠りたくなくても
眠れなくても
眠りましょう

ハンモック

わたしを揺らして眠らせて
たつぶりの陽射し
たつぶりの時間
たつぶりの傷痕

生きたくなくても生きられる
ひとつ見つけてひとつを失くす
見つけたものはもういらなくて
失くしたものを恋しがり
ハンモックで揺れている

誰にしたかわからない約束を守ろうと

君のヤメルトキに付き添った

——なぜ看病してくれるの——

怪訝な顔は白く冷たく

栄養を摂らせねばと焦ったが

君に浸透する成分はどこにもなくて

シガフタリワワカツマデ

付き添うことはできなかった

「号泣」と

わたしだけが覚えている

五月九日 君の誕生日

君はまた戻っていく

空は蒼く押し黙っている

四十九日後

彼方の嵐に急かされた波が

剥げた欄干を洗い

わたしは号泣した

いつの間にか首から外れて

失くなったネックレスのことを

思い出していた

わたしをのせたハンモックの
揺れが止まる
終わりたくなっても
終わる

砂を噛む

波打ち際では
月の破片が重なり離れ
真夜中じゅう光っている
沖では稚魚の群れが
半透明に渦巻いて
真夜中じゅう踊っている

岸は波に噛まれ続ける
最小まで砕けた石が
解けることはない
味気ない口惜しさを
溶かすこともない
熱心な顎の下で
冷たく硬く斜めに転がる
闇に白が溶け出して

明らむ遙かな海流に
自問も自答も運び去られ
不運も不幸も輝いて
過去も未来も沈められ
幸も不幸もなくなつて
あなたは今朝
難破している
砂は今日も
咀嚼されている

阿部静雄

黒鳥を撃つ

人は果てしなく努力し生きつつ
死に赴く

それまででは意欲と願望とを秘めて
生きるのだ

ましては退屈することなど
一切ありえず

あるのはただただ
容赦なく襲ってくるあらゆる苦しみと

頼れるのは自分しかない孤独の宿命
それが生に懐妊した種子

それも年輪を刻めば刻むほど
それが真実・真相であることが

心を重くする
ああその種子を！

できればなんとかして
根こそぎひっぱりだして

この地球の外に思い切った投げ捨てたい！

だが だが

命を捨てねば決してできないこと！

わかっている

わかっているからこそ

苦と孤独の重みを背負って

じーっと

耐え抜くことしかない

辛抱と労苦の連続の生を！

観よ！

現実の重圧に耐えてきた

「自画像」を

苦に強く鞭打たれ

歯を食い縛っては食い縛い

耐え抜けば耐え抜くほどに

情念が沸騰したあの顔貌に

痛々しい魂が形相となって影を落とす

観よ！

過酷な労働の苦と収穫の喜び

農婦の悲喜劇の生きざまそのもの

表象となつて現れた「古靴」を

観よ！

生きる努力の合間にふと

現れた「ひまわり」

太陽に力んで微笑む

あの顔に太陽が愛を語る
その優しい対話を
観よ！

「糸杉と星の見える道」を
これこそ生きたる努力を越えた

宇宙の愛に包まれたあるべき姿
恋慕の告白　ゴーギャンの坐した
「アルルの椅子」も

精神病院の固い鉄格子から見えた
暗黒世界を煌めく光で照らす

心のうちの「星月夜」も
どれもこれも

生身となった絵具をたっぷり
画布に擦り付け

激しい生の意欲・願望と挫折の
情念に揺さぶられながら

逃れえぬ苦悩と孤独の精神
なんと深い真実の告白であったことか

ああこうしていつまでも
家庭を大事に護っている弟に

重圧を託すわけにもいかず
常に襲ってくる精神の傷になす術もなく

自分の才能を確信し頼りにしても

絵は一枚も売れず

引き裂かれた神経が
汚れた壁にかかっているのみだ
観よ！　観よ！！

急ぎ足で向かった黄金色の
激しく揺れ動く麦畑

緑青色の天空　不安の嵐を孕む
彼方に消えゆく血色の道

凶が群れ飛ぶ黒鳥！
撃たずにはいられないぞ

あの黒鳥を！
生まれて死ぬまで

不気味な存在である
悲運な黒鳥を！

撃った
宇宙に響いた一撃の爆音！

撃ち落としたのだ
突然動きを止めた黄金色の麦畑

凍てつく陽光
血流のような道の彼方に

魂の解放の死地があればこそ
儂い夢とともに

精神の光が折れた

悲しみの真実の姿

自画像を残して

逝った。ゴッホ三十七歳

死に差しかけられた俺も

いつかは生きるのを

止めようぞ

だが、俺には死を急ぐ理由など

どこにもないではないか！

それに戦後

気晴らしと好奇心で

時間をおいやって

七十の齢を重ねても

なにも掴み得ず

今でも気晴らしと好奇心で生きる

愚か者ではないか！

それにしても？

俺は気晴らしと好奇心の鳥を

そのままほっておいてよいのか？

思い切って撃ち殺さねば？

そうだ！

撃ち殺さねば！

撃ち殺さねば俺はない！！

再生

おまえの劇場とは？

嘘と他人の顔がみちた

都心の孤独な戦場

功利と合理に徹した

出口あつてなし檻の中

苦しい暮らしを賄うための

ドラマが輻輳する組織！

役柄を演じきって四十年

苦しみも楽しみも

悲しみも喜びもなにもか

味わった四十年

だがおまえの四十年とは？

地位と財を握るための役者稼業

ではなかったのか？

おまえの良心も肉体も

清い魂さえ生贄にして

拍手喝采を浴びる役者に徹し

名優になることを目指した

のではなかったのか？

自らを消し込んだ名優に

そしておまえは競争という他者排除に

夢中になって時を刻みつけ

時を利己に仕立て上げたのだ
家庭の崩壊？

当然そうだった

ペルソナを剥ぎ取って生身のお前になれぬ以上
ドラマの流れは変えられない

なにかも舞台で演じるおまえが
それがおまえと思つてしたことだ

おまえは他者を傷つけ

他者に苦しみと深い痛みを与えた

成功とはそういうものだ

だがそれが逆流してきて

おまえは慢性胃炎と食道炎で苦しめられ

それでもおまえがおまえを止められず

ついに四十年をも

向こう見ずに演じ尽くしたのだ！

それがある日

声も出さず息もできず

死という激烈な雷鳴がとどろきわたり

死の淵をのたりまわる

悪魔に呪われたごとく

幾日も底知れぬ不安と苦悩

おまえのこれまでの存在が

虚しい存在になつてしまつたのだ
ついに！

暗転はもう決してない

照明が輝いた劇場の光は消滅し

日夜檻のなかで

自らを消し込んだ

おまえのドラマの幕は降りた！

幕は完全に閉じられた

底無しの闇が朝に昼になり

夜はといえは更に深い闇となつた

闇のなかでの暮らしは

自問の繰り返しとなつて

日々悶々と悩み

消し込んだお前自身を

取り戻せるだろうか？

どうしたら取り戻せるだろうか？

取り戻さなければ！

と心のうちの闇にむけて叫び続けた

ある一日の終り

なぜか分からぬが

限りなく限りなく

低く重く響いていた不穏な雷鳴も

遠くに去つていってしまうと

襲ってくるものがあつた

刻一刻と刻みつけた「時」の

あのような醜いベルソナが
自分でないような自分が
車輪となつて迫つて来た
だがそれも次第にゆつくりと
ころの奥を通り過ぎて
消え去つていくようだった
轍を残しながら・・・
朝の幕開けか？
新たな冬の陽射しの
凍てつく一条の光か？
ああこれこそが
朝の幕開けではないのか！
おまえの消し込んだお前を
生身のお前を
新たな「時」に刻み直すよう
やり直すときがきたに違いない
とすれば今度こそ
現実を生き直すのだ
お前の現実を
清き気高き魂にむけて
命絶えるまで！

老女の眼

私の心は爽やかで晴れやかだった
カーネギーホールでのコンサートで
幾たびか涙を胸裏に浸み込ませた
楽想とたわやかな旋律に出会い
狂おしいほどの感激に酔っていたからだ
それに私の欲びの源泉
それを私の内に見つけたのだ
束の間の幸福の時を得た喜悦
そんな追想に濡れているときに
アパートの玄関に置かれた古椅子に
ひっそりと佇んでいたあの老女の
悲しげな眼に出会った
老女よ
どうかあなたの孤独な心と痛みを
今日こそ無かったことにさせて欲しい
私の今日という今日の欲びと慰めが
終日わたしのものになるのだから
身寄りのない老女よ
待てど暮らせど中東から帰らぬ息子さん
彼が命の綱であったことも
希望の源泉であったことも
よく分かっているけれど

すでに逝ってしまったのだ
私の母もあなたと同様に黙し耐えて
良人を待ち続け

南方での戦闘から帰還してみれば
重い病気をひきずってあつと言う間に
若くして命を止めてしまった

どうかお願いだから私の母の眼が重なる
悲愴な陰を宿したあなたの顔を私に向け
見つめないで欲しい 今日には
全ての苦悩から解き放されているのだから

そうだそう言えば

あの楽想・楽音に深い悲しみが宿り
それが流れるように響きわたっていた
私が緊張したのはその人生の儂い情感を
秘めた楽想から流れ出る悲愴な
旋律ではなかったのか

夜の帳にひとり佇んだ老女

私は孤独の果てのその姿を思いやった
そこに老婆になった母がいる

そう思うと

あの悲愴な旋律が再び狂おしいほどに
私の心をいっぱい満たし始めるのだった
だがあの感激と陶酔感は二度と戻らず
楽想の奥から溢れ流れ出て

私に襲ってくるのは
苦悩に満ちた現実世界であった

不安の津波

黄昏時に病院を後にした
深刻な妻の乳癌の診断で
心臓がおののいた
妻の悲しい胸は重苦しい
底なしの不安の悲鳴をあげる
これから耐え続けねならぬ
青白い日常の試練
私はどうすべきか？

メスがそこらじゅうに
深い無残な孤独の痕を残させ
抗癌剤と放射線が大量に
生の光を消滅させ
命に悲鳴をあげさせた
病院が恐ろしいと妻がいう
病院恐怖症になった妻
私はどうすべきか？

老いに病が重なれば
死の影が宿るのは当然の宿命
宿命あつての生なれど
死は津波のように恐ろしい
その恐怖に妻を立ち向かわせるには
私はどうすべきか？

妻も私も二人の愛を見つめ
何があつても
その存在を確かめあい
慈しみあつてきた
だけど

妻が私の存在に関わりなく
生の無常さと儚さを悟ってしまった
かのように人生の無意味さを
ふと漏らしたら
ああ私はどうしたらよいのか！
流れゆく悲しみの黄昏時
絶望的なまでに孤独で苦しいぞ
妻との険しい人生を
愛欲と優しい愛で
宇宙に包まれるように
生存してきたのだから
だが嘆くな嘆くな

何が起ころうと
創り護りあげた二人の心の弦
を切らしてなるものか
何が起ころうと
愛する妻と私以外には
もはやなにも存在せず
この世さえ死さえも
その告白こそ
唯一私が妻にすべきこと
私の使命なのだ

母の元且

「もう道が無い」と九十を前にして
母がふと言葉をこぼした
荒涼とした半島の岬の険しい崖つぶち
を思い起こさせた
その言葉がいつまでも郷里を捨てた
私の心をずっしりと重くさせていた
戦後父は引きずっていた病で
あつけなく逝ってしまった
まだ若かった母は

一人っ子の私を連れてそれこそ無一文
惨澹たる敗戦の泥沼を全身に被って
全神経を刺されながら生きてきた
思えばそれが母の心の原景のようだった

日本が立ち上がると母も立ち上がり
どこかで美人を看板に店を切り盛りし
男を惑わし身持ちも多少よくなった
母が無い金をはたいて買い集め
残していった絵をみると

どれも原色の鋭い対角線が異様に交差し
抽象洋画に似たモダン画

母の趣味とも思えないものばかり
とすれば 棘（いばら）の原景から
解放されたいとの母の胸のうちの
激しい嵐であったのかもしれない
ドレスといえばこれも

その絵のようなものばかりで
張り切ってモダンに生きようと
頑張ったに違いない
私たちもそのモダンドレスに絡まった
光と影の宿命を背負ってきた
のではなかったのか
着物はといえばモダンにあらず

和の伝統美を模したものであった
長い間の出稼ぎから帰郷した母が
良人が残していった家で
誰の世話にもならず独りで暮らしを賄い
襲ってくる激情の抑えと生きるすべを
眼が光った仏壇の仏にゆだね

それでも一生自分が主人であるように
良人の位牌の傍で心のおもむくままに生き
孤独に花を咲かせつつ自助を貫いた
咲かせた孤独に

幸福が訪れたのであろうか？
私には分からない

あるとすれば母の努力の上に瞬時
虚しく去り尽くす山桜を
咲かせたに違いない

私と言えば早くから
私をかえりみない冷ややかな母もとを逃れ
アメリカなんぞまでやってしまった
帰郷も形だけとなった
私も母に似て我がままに独立独歩を貫き
日本の活力に押されながら異邦に留まった
やがて高度成長の金銭欲に浮かれた
未来に目隠した黄金時代が過ぎ去っていった

母にとつては齢の高まりのうねりに

心を翻弄させる生活が待ち構えていた

一人で荒涼たる半島の岬での生存に

追憶もおぼろげになり

足腰も弱まってついに倒れてしまった

それでも歯を食いしばって

風の強い岬の果てまで一人生き抜く

と言ひ張るのだった

生きんとする生の衝動これこそが

母の心の奥に渦巻き

光を放射している

たとえ記憶が逝ってしまおうが

岬の果ての灯台であつた

母が原景から解き放されたのは

さびしく夕陽が沈んでいく黄昏時であつた

私が異邦から急いで母のもとに駆けつけ時は

華やかな新しい風が虚しく舞つた

元旦の日であつた

私が老い尽くしても

この日だけは忘れぬようにと

とどめを刺すように・・・

記憶の吊いの日々のうちで

母が半島の岬にやってきたとき

異邦にいた私を呼ぶことはなかった

母一人で全てを段取りできるものと

思つていたのであろうか

それとも死の崖っぷちまでの時間に

まだゆとりがあつたのであろうか

逝つてしまつた今では私には分からない

後で分かつたことは

猫背になつた母が珍しく夜空を見つめ

輝く星を指折り数えたことだつた

私を探していたのだらうか

戦争直後に帰還し逝つてしまひ

母が身に付けるようにして傍においた

位牌の星に手を伸ばしたのだらうか

それともすでに散つてしまつた

親族や知人の流れ星に

過去の思い出を重ねたのであろうか

あるいはおぼろげになつた記憶を

あの星たちに預けて

心を真空にして生きたいと

望んだのであろうか

私には母の気持ちやどれなのか

これと思えば信ずるものはない

ある日強い風が部屋を軋ませた

ふと振り向けば本棚から崩れ落ちたものがあった。その中に薄汚れた写真帳があった

朱色で「寿」と印刷された結婚写真

鉛筆で昭和十九年三月二十八日挙式と

丁寧な文字で書かれ私を見つめていた

私がこの結婚写真をいつ見たのか思い出せない

だから私は愕きをもって母と父を眺めたのだ

それは挙式後に父は戦争に駆り出され

南方の戦地に送り込まれたことの証でもあった

弟が南方で戦死してしまっただけというのに

よくぞ無事に帰えられたものだ

幸運？そんなものはない

あるのは否運だけだ

誰もが苦悩と激痛を背負って帰還したのだから

私たちこそはそれを引きずった炎症が

麻痺状態になった末梢神経ではなからうか

父は耐え難いマラリアにかかっていて

その時 母は私を生み落してまだ日が浅かった

その身で父の看病とは恐ろしいほどの

死をかけた苦勞ではなかったのか

経験しないものにとっては

その深さは到底はかり知りえるものではない
それに母の存命中に

「お前を生むときに余りの苦しきで

やつと帝王切開でお前が取り出されたの」と

母の告白が手に取るように追憶が輝き

それが一段と私の心を重くし悲しみを深めさせた

更に父が地元から広島経由で戦地に赴いたことを

叔父から知らされた記憶をとりもどしたとき

あの「黒い雨」(注)の激越な恐怖を思い起こさせた

母は父の戦争については一切沈黙し

顔に蔭を宿しただけだった

私が米国に住むようになってからというもの

母に父の思い出について聞いても

母は固く口を閉じ私を睨み返すばかりだった

それに私も執ように母に問うことも止めてしまった

もう過去を掘り下げること今更できるものではない

周りのものが皆老い尽くして散ってしまったのだ

私は長い間異邦にあつて母と父のこと

自分の心のうちも無風景のままに

人生の目的をも掴み得ず気晴らしと

目の前の好奇心に明け暮れ生存してきた

それが私の老いの虚しい日常なのだ

それにしても母が死の崖つぶちで

夜空の星をじーと見つめ数え

誰かを探していたというあの姿が

私の全身にこびりついていつまでも離れない

今となつては母に尋ねることはできないが

それが私であつたことを信じた

それともいつも欠かさず祈りを捧げていた

位牌の星を探していたのであろうか

探す？ いやそれは違う

耐えながら長い間待っていたのだと思う

異邦の私と位牌になつた父との二人が

いつも待っていたことを

母はしっかりと受け止めていたのだと

光の灯台であるかのように・

記憶の弔いの日々のうちで

母の生きる目的と意味が私の心に浸みわたつた

注・井伏鱒二の小説の題名

人間が落ちる

今日も数えてしまつた

一階から二階へ上る階段の数を

乙女の裸身に美の輝きがまとつた

レントンの絵に接吻するために

二階から一階へ降りる数を

大理石の裸身に性の輝きを秘めた

ローマ彫刻を抱きしめるために

メトロポリタン美術館で

踊り場の下は23

踊り場の下は23

なんと均衡した数であろうか

調和が踊り入る

死せる時間が美を燃やす

沈黙した美術館

私の孤独な地上の園

数えてしまつた

美術館から地下鉄の駅までの歩数を

数え尽くし終わると時間を止める

地上の世界と私の存在を確認するように

そしてまた数える

誰も数えもしない

落ちてゆく奈落への地下鉄の階段を

不気味で暗鬱な気分に関りながら

隠退して起こつた私の異常な癖

色あせていく地上に

抗っているのだろうか

いくら数を数えたって

滅びゆく地上の現実が変わらず

それでも数える

その果てに

時間の死がふと横切る

分かるはずもない

いつか必ず決定される数字が

その数の存在が私の日常になる

今日も数えてしまった

長い間の孤独な群衆の足跡が

化石になったような

黒ずんだ地下鉄の

人間が落ちていくような階段を

ああまたしてもあの

地下を這いずる棺のような

暗い電車を

待たねばならぬとは

あの美にしがみつきのながら・・・

虚飾の無い終着駅

死後のかなたに何がある

苔むした墓碑か

誰も訪れることのない

名前さえ消えた

崩れ落ちた石塔

消える運命にある墓石！

それとも

日本の宗教の開祖が坐して

私たちを待っているのか

私の死後のかなたに何がある

維持費が尽きた

石ころの墓碑

それもあつというまに平地になり

捨てられ消える運命にある墓石？

誰も待つてはいやしない

私を必要ともしてはいない

私は私に言い聞かせた

戒名も墓碑も位牌も何もかも

不要だと

私の終着駅には私が誰であるか

立派な墓石を立てることなど
無駄であると
葬儀も私には
必要無し

私の死後のかなたに何がある
何も無い
土や水に還る時間がある
永遠の無に還る

たとえ私に子がいて
子の死に遭遇しても
私同様に墓碑もなく
そつと土や水に還そう
私の生きている心にその子の墓標をたてて
毎日どこにしようが祈る時間のなかで
魂を鎮めあい
永遠に愛する時間に入ればそれでよい
たとえ私の時間が死んでも
遺言書に私の信条を我が子に
貫き護るよう印すだろう

私の余生は
静かで穏やかで

孤独を愛し
やがて無の終着駅がやってきて
先に到着した父と母に
加わることにしよう
私はそれを念じ噛みしめながら
最後の駅に向かうことにしよう！

一人息子の宿命

黄昏時の
海に沈みゆく水の古都
古びた教会を巡り歩けば
水に足を濡らしても
祈る老婆に心奪われる
周りのくすんだ磔刑図に輝きもなく
なにもかも朽ちていく果実に似て
私を暗く重い気分させる
たとえそうであつても
一心に祈る老婆に自分を重ね
私の孤独な悩みを沈ませる
夕陽も教会も古き都も
すべてが水に沈みゆく
ベニスに涙して嘆く

カモメ

太陽の炎に

真皮を剥ぎとられ

真つ赤に焼いた

壮年の裸体

白熱の白浜と紺碧の深い海に

恋人と絡まった

夜となれば

闇の星の光に照らされて

艶めかしい愛がくねり踊る

だがもしあの病弱な月光が蒼白になって

喪の月影に入ってしまったら

私は孤独にも一人で

カリブの海に迷い漂うのみ

ああ私に愛を残して逝ってしまった

カモメよ

青春の促しに身をまかせ

故郷を捨てて

大陸に足をつ込んだ異国

人間はうようよいるが

知る者は誰もいない

まるで原初の人間のように

狂気になって生きる糧を

霞に求めた

ああ感傷とは無縁と思ひしや

なぜか捨てた郷里の思いにかられ

母一人置きざりにした孤独の雨に打たれ

果てしなく涙が溢れ零れ

じーと見つめ尽くした

ハドソン川の一羽の白い

カモメ

父が終戦直後逝ってしまったあとで

童の私が母に愛して欲しいと

迫った日々

けれど母は黙って出稼ぎに

どこかに行ってしまった

残された私の淋しさ

唯一私を優しく見守っていたのは

戦争を見つめ尽くし

日本を癒した富士

そして優しく童の裸身を包んだ

平和な駿河の海辺に

めくばせして

私に釣り場を知らせた

カモメ

どこにしよう
ちっぽけな私の隠れた人生の
悲喜劇の最終場所を

まてよ

ああそこには父も母もない
私だけの灰が勝手に放たれる場
どうしよう

寺の納骨堂に残した父と母を

無惨に孤独に置き去りすることはできない

全てを人生の風に放してしまおうか

たとえ信仰に燃えた母の意志に反しても

一人息子の陰の宿命として

私の孤独な悩みを ああの磁場の

絶えず遠ざかる引き潮に託そうか

カモメの眼を痛めても・・

狂風

ウエストサイドの

荒廃した汚損の激しい

アパートの暗い窓から

破れた黒いカーテンを透かして

眼が光る

またしても

群れをなす崩れた陰鬱なビルの
谷間の影から

光が・・・

おやあれは？

枝葉をひろげた大樹の陰から

射してくる異様な眼

何かが誰かが私を見つめている

何者だろうか？

私が移動すれば

ひそんだ奴が角度を変え

ああ私には隠れる大樹もない

遮らせるものは何もなし

私は異郷の空中に身を晒している

また前方からひそんだ眼が光る

不気味な妖怪の存在！

奴が怖い！

私は逃げる

だが足がすくみ動かさず

私は背を向ける

それでも私の肉体を穿ってくる
怖い！

ああどうしたらよいのか！

奴が迫ってくる

妖怪の霊になつて

助けてくれ 助けてくれ！

無言の叫びをあげれど

ひとつこ一人いない

大都会の原野

今日も狂風にとりつかれ

神経が千切られてしまったのか

理性など紙切れに等しい

ああそれにしてもあれは無残にも

一人郷里におきやつた母の霊か・・・

それとも私の無謀な好奇心に

冷や水を浴びせる私自身の化け物か・・・

誰一人知るひともいない

大都会の原野

マンハッタン島に旅発たせた

神経過敏の青い風が吹き荒れる頃

淋しさと孤独の果てに・・・

妄想

大きな自由があるような気がして

小さな自由の郷里を飛び出して

あらゆる縁を置き去りにして

異郷に旅発たせてしまった

なんという若さの魂よ

それがどんなにか無謀で

危険な未知への好奇心であるうと

反逆に魅せられた

解放の感覚

若さの勝利とは

放浪者のメダルを得ることもある

薄っぺらな反逆児の虚像を装って

大きな自由があるような気がして

異郷に住みつけば

オアシスなんて一つもなく

そこは荒涼とした砂漠に似て

砂粒のような人間たちが

ひしめきあつて蠢いている

背負つた夢を実現させようと

砂粒！

皆が皆 荒海に痛みつけられる放浪者！
生きるのをやめるまで

それでもここに大きな自由があると
若さにかまけ自分というものを

知らぬまともかく

解放の旅に出させたけれど

日ごと魂は氷のように冷たくなっていく

砂粒の孤独

孤独という病

解放と自由の放浪に

夜の孤独が私の宿命になってしまった

一生の

それでも

それでも大きな自由があると

小さな自由を手玉にとつて・・・

ホワイトパイン

日照りを嘆く蟬時雨

とあるカレッジの校庭に

物憂い身を踏み入れると

なんとそこは

箱庭の佇まいに似て

静寂な緑の世界

大樹のホワイトパイン

私に微笑んでそっと息を吐く

その香りが

光輝に満ちた大気に染み入って

芳しく私に麻酔をかける

私はその美のような芳香に酔って

芝に横になり

晩夏の老年を自覚する

ああ香りがなんと美しいことだろう

美を溢れさせるホワイトパイン

愛と幸せを刻んでいるようだ

突然

教会の鐘が「時」を告白する

静寂な時空のひび割れ

「時」が顔をだす

あの青の年輪の影が

仕事に恋愛に

何しても実現できず

困窮と失敗の連続の

落伍者の

暗い悲惨な自画像を揺らめかす

ああホワイトパインよ

どうか芳香の美の麻酔を止めないで
もつともつと深い死の麻酔を！

ふと気がつけば
私の傍に一本の老木が切り倒され
「年輪」が孤独にも私を見つめていた

都会の顔

地下鉄の駅を出ると
外はどんよりした陰雲
眼の前の高級デパートには
各国の旗がバタバタと文句を言い合い
まるで難民に激昂しているようだ
ふと通りの角に眼を移す
一人のみすばらしい中年女が
汚れた毛布にくるまって
冷え切ったコンクリートの上に坐し
身体を小刻みに揺らしていた

私は動けなくなつた
不安に晒された女の顔

むき出しになつた裸の肩
毛布から突き出された下肢
極度にやせ細つた胸
女の前には紙コップが凜として立っている
通りは厚手の外套に身をくるめた
朝の無表情な顔と顔が行きかい
大都会のもつれた喧騒と
いつもと変わらぬ増埒の雑踏

女はアジア系であろうか
黒人であろうか
スパニッシュ系であろうか
白人であろうか
それとも中東系であろうか
私にはどうでもよいことだ
一人の生存権をもつた人間に変わりはない
だが、なぜあのような死に追いやられるような
格好を、なぜそこに
なぜこの真冬の最中に
真実を知ろうとするものは誰もいない！

それにしても朝から大量に
高価なバッグをさげた顔
ショッピングバッグを抱えた顔

黒カバンに書類を詰めた顔
リュックに本を詰めた顔

女も男も 老人も中年も若者も
顔という顔が過ぎて去ってゆく
あの女を見もしないで
ここニユーヨーク

あらゆる人種の
宗教の 文化の 階層の

その顔なき顔が

あいづらはたとえ信徒であったとしても

他人の顔の騒音に過ぎないのだ

施す顔もなし

哀れ悲しむ顔もなし

もし神父が 牧師が ラビが

イスラム教の指導者が

仏教の導師がこの光景に出会ったら

顔だけではすまされまい

と思うのはそこから動けぬ私だけか

そう思いつつも私は職場に遅れてはと

言い逃れを自分に言い聞かせて

紙コップに施しを入れた

紙コップには紙幣はなく

底さえ見えた貧しさで

コップが泣いている

高級デザートには依然として

各国の旗が強くバタバタと叩き合い

まるで戦争の残忍な響きのよう

遠くの遠くから

赤子の 子供の 女の 老人の

あらゆる市民の慟哭の呻きが

あの女の全身の表情と重なりあって

重く聞こえてくる

ああ私たちの世界では今でも

無差別に近い人殺しが

空から地上から海上から

国利の口実のもとに

当たり前になっている朝の日常

皆が皆 他人の顔になり切っている！

他人の顔！

私もその一人に違いない

あの女を素通りしてしまった後では

それにしても心残り

遠くからふと振り返ると

一人の身綺麗な痩せた女が

あの女をかばうようにして

腰を折っている
哀れみと悲しみを全身に放射して

私と言えば
ああ未だ大都会の顔も捨てられず
心の壁にベルソナをふら下げ生きている
重い呻きの嵐に叩かれながらも・・・

都会

都会は偽ることを好む
騒音に紛れて嘘をつく
雑踏では嘘まるだしだ
偽りの雨がいつも降っている
だから都会の沈黙は偽善の仮面でもある
人間は偽ることを嫌う
騒音に紛れても
雑踏のなかでも
雨風にあつても
いつも偽りを憎む
だが都会の生活の風にあたってみれば
そうもいつては居られない
おまえの理性など

都会の不条理に出会えばなえきつて
おまえが都会の息を吐き出す
人間の一人になる
おまえがああ嫌だ嫌だと嘆いたとしても
おまえは矛盾を散らす人間となつて
いつまでも都会にとどまる
それがいやなら
出ていく死を選べ

飯塚彩夏

畢生

風に吹かれてきたけれど
今日も夢は醒めぬまま。

去りゆく季節に落涙し
迎える季節に戸惑った・・・

(ただならぬ悲しみよ！)

言葉に触れるほど

心は青くなり泣いていた。

鮮血に染まった手を

拭うことすらできなかった。

(悶え苦しむ運命(さだめ)よ！)

道端に咲いていた花を
摘んで帰ればよかったものを
私は怖気づき諦めた。

(華やかな期待よ！)

繁華街に立ちゆく看板の
人知れない悲しみに
私は気づいている。

(我が儘な幸福者よ！)

目の前に広がる沢山の岐路に
私は惑わされている。

上田康宏

骨

我々が主君を持たなくなってもまだ七十年しかたっていない。それまで千七百年近くも我々は

王である天皇であれ、封建領主であれあるいは將軍であれ

連綿と続く主君に従属し、それに仕える独立した個人としての「姓」を持たない

臣という民だったのである。

明治維新は民主化ではなく王政への復古だったのである。

その復古は数次の世界との戦争を通じて高潮し、強固となり、ついに極点に達して

天皇は、世界史に類例を見ない神となったのである。

だから、敗戦の結果天皇は自己が神でないことを

世界に宣言しなければならなかった。……二十世紀にである。

三百万の国民と

二千万以上の外国人の生命を犠牲にして

我々はこの国の歴史上はじめて

それぞれが自己の主人となった。

だから、そのことを鏡として、常に

自分の姿を正さねばならないのではないか。

だが、果たして

戦争は本当に終わったのか？

一人の生命には多くの生命が

結びついている。

なるほど戦争の実体験を持つ人間は

歳月とともに数を減らしている。

だが、その生命を取り巻く生命は

なお、生きて苦しんでいる。

さらに

もし市民が、死体を遺棄すれば

死体遺棄罪

「死体、遺骨、遺髪又は棺に納めてある物を損壊し

遺棄し、又は領得した者は、三年以下の懲役に処する」

が適用され刑罰を受けるが

今なお海外には

樺太・千島 二万二千

ロシア 三万三千
中国東北部 二十万六千
中国本土 二万七千
ミャンマー 四万五千
インド 一万
インドネシア 二万
ニュージーニア 九万七千
ビスマルク・ソロモン諸島 六万二千
硫黄島 一万二千
フィリピン 三十六万九千 など
百十三万体制もの国民の遺骨が
風雨に曝され、炎熱に焙られながらも
どうしても果たせなかつた帰国を
待ち望んでいる。
市民には重罪であるものが、果たして
国家には許されるのか？
彼らはどこにでもいる
市井の、普通の人間であり
好むと好まざるとにかかわらず
義務を果たすため戦場に送られ
人の生命を奪うことを
強制されたのではなかつたか！
彼らを忘れることは、国民として
許されることなのだろうか？

私には戦争の実体験がない……
それで済まされることなのだろうか。
彼らを粗末にする国が、果たして
本当に国民を大事にする国なのだろうか？
あの戦争の結果
自分が国家の主となったのだが
その手にした主権を
今、我々は本当に大事にしているだろうか？
市民としての
厳しさと勇気と連帯はあるか？
戦争は本当に終わったのか？
置き去りにされたままの
あれほど母国に帰ることを夢見ていた
あれほど妻や子や親たちの顔を見たいと望んでいた
今は声もない人間たちは、いつ
安息の時を迎えることができるのか？

虫

私の手のひらの上を
まるで重さのないもののように動く
テントウムシよ。

球体の体、大胆で精緻な
黒い円とオレンジの
光り輝く、ぬめらかな意匠……
まるで毛のような脚、一粒の頭……
その中に、確かに生命が灯されて、息づき
極くわずかずつ
皮膚に微細な感触の波紋を広げながら
歩いて行く……
これは奇跡だ。
人間は確かに
電気をつくり
巨大な構造物をつくり
自動車をつくり
飛行機をつくり
潜水艦をつくり
衛星をつくり、果ては
一万五千発もの
核弾頭をつくり
神経の叢のような
通信網で
地球を覆い尽くした。だが
これはつくれない。
このように小さな、優美なものの中に
生命があるとは！

もし人間がつくるとしたら
それは、象ほどもある、巨大で
醜怪なものになるだろう……
人間はつくれないのだ。
生命を……
……摂理……
今、この小さな生命が
私の手のひらの上にあることは
奇跡ではないだろうか？
人間が発生以来連続として重ねて来た世代……
それと同じ時間だけ、この小さな生きものも
みずからの世代を重ねて来たのだ。
この虫と私との、今という瞬間での
このこという場所での
邂逅……
これは奇跡ではないだろうか？
私たちは長い生命の両端で今、出会ったのだ！
虫にとっては、私の皺は谷であり
皮膚は山だ。それをそろそろと渡り
虫は今、手のひらの端まで来た。そして
立ち止まり、何かを考えるように
静止していたが、一瞬
鮮やかな外皮に閉じこめていた
大きな翼を

露わに突き出すと
飛んだ！
その突然の意志と力の閃き！
音もない気流の荒々しい乱れ！
光と色彩の煌めき！
摂理！

江口久路

吠吠

はうはうと
つばきを垂れた犬が
声帯を殺がれ
声を出せない犬が
鎖に繋がれ
逃れられない犬が
吠えた振りのすがめの犬が
俺を睨み
鎖に首絞められ
はうはうと
声のない声を喘ぎ
俺はお前だ
俺はお前だと
嘘の傷負った贖物の舌で

偽りの言葉で

はうはうと
はうはうと
市井の空に
俺を責め立てる

かたすみの声

僕にはんげんじゃありません
にんげんなんかじゃありません
死んだ子の肋(あばら)にこびりつく 乾涸(ひから)び
た魂の外皮(がいは)です
死肉を喰(く)らう毒虫の ぼろぼろに腐った羽根の一
片(ひとひら)です
僕にはんげんなんかじゃありません
にんげんなんかじゃ
縊死させた子の 喉ぼとけに絡まる古びた砂袋です
その袋をこぼれ落ちる 血色(ちいろ)の悲しい一粒の
砂です
僕にはんげんなんかじゃありません
僕はけつして

にんげんなどでは
けっしてないのですから

鋤子ふたみ

むらさきはなな

「この花の名は？」私が聞くと、

「むらさきはなな」あなたは面倒臭そうに答える

春になると土手いっぱい咲く　むらさきはなな

あなたの心変わりに気づいていたわ

離れていく心をとめることはできないけれど

私の事は忘れさせてあげない

むらさきはななが咲くたびに

あなたは私を思い出すの

隣にいるのは私じゃないけど

ずっとずっと思い出すの

春になると…

「この花の名は？」私が聞くと、

「むらさきはなな」あなたは面倒臭そうに答える

春になると土手いっぱい咲く　むらさきはなな

あなたの心変わりを許してあげるわ

せめたりしないし　すがったりもしないけれど

私の事は忘れさせてあげない

むらさきはななが咲くたびに

私もあなたを思い出すの

隣にあなはいないけど

ずっとずっと思い出すの

春になると…

いつか

ありがとうって言えるまで…

冠 ゆき

刃 (やいば) Lane

ねえ聞いて、
階段の上に立つと
落ちていくあたしが見えるの

ママ、教えて あたし、
どこか普通じゃないのかしら
ママ、答えて あたし、
このまま狂っていくのかしら

見上げれば
ビルたちが空ごと
あたしに降りかかってくるの
すり抜ける
タイヤに巻き込まれ、
血だらけのあたしが
横たわる

パパ 助けて、あたし
踊る足を止められないの
パパ 守って、お願い
あたし、このままちぎれていくの？

ねえ聞いて、
まぶたの奥では
刃がきらめくの
今夜も眠れない

ママ、どうして
あの人あんな目であたしを見るの？
ママ、もしかして あたし、
どこかおかしいのかしら

かんぼじあの情景

私の庭は川の上
湖(うみ)へと広がる川の上
小舟で森へと分け入れば、
琥珀とミルクの水面がゆれる
油のようにゆるゆると

光と音を呑み込んで。

もうすぐ七月、恵みの季節
ひとも、つちも、かぜも、はっぱも、
すべてを洗う雨がふる
すべてを育む雨がふる

ぼくの前には石の寺
魔力を忘れた石の寺
赤い土の道の果て
時を木の根に吸い取られ
その屍を横たえる
祈りよ、どこに潜んでいる？

何年か前、おじさんが
パイナップルを踏んだって
身体も土も跳びはねて、
山まで赤くなっちゃって。

もうすぐ七月、恵みの季節
ひとも、つちも、かぜも、はっぱも、すべてを洗う雨
がふる
ときも、かわも、そらも、ねがいも、すべてを育む雨
がふる

君影港

冬の空に

月とは別の、白を探した。
寒空は遠く、近く、
ぼつかりと空いている。
今に頭から
そのぼつかりと空いた空に……

太陽とは別の、白を探した。
冬空は高く、低く、
ぼつかりと空いている。
今に頭から
そのぼつかりと空いた空に……

平衡感覚は逃げていく。
めくるめく青に、

月とは別の、
太陽とは別の、

優しい白を探していた。

星座

一等星を指差して
他人の言うとおりに結んだら
どうして上手く行かなくて
ぐにやりぐにやりと曲がりま

真白い月を見ていたら
明るい星々並ぶから
群青色も失せたよう
色とりどりの夜でした

騙し絵「現実」

車両が行き過ぎた拍子に
髪がひと束目隠しをして
払いのけることもなしに
線路の向こうを見ていた

真つ直ぐなピルの境界が

季節外れの昼気様に遭い
澄みわたる寒空の青さが
現実の街並を嗤っていた

この目の映す世界は
騙すただけにあつたらしい

後藤 順

道

錫色の空を死ぬまで仰ぎ
何の恥じらいもなく
枯れた乳房を拭かせてくれた
あなたを見つめるだけの
わたしは心が痛む

梅や桜をめでる心で
生きとし生けるものの冬の日ざし
雪解けの水滴が海へと向かう
あなたが教えた道

何をも誰をも
呪うことばなど吐くまいと
わたしは歩まねばならない
あなたが教えた道

今宵も星が流れてゆく

何億年も要して届いた光に
ひとの一生など
涸れ井戸の泡のごとく土へ
あなたは帰るのだから

別れを終えると
雪が舞い始める
そして
あなたは歩んだ道をかき消す
記憶もしくく、しくく
降りつもる

わたしが決してたどれない
あなたという道

岸辺

家で死にたい
終末を知る母が帰ってきた
北風がさまよう夕暮れ
裏の畑の枯れ草たちがざわめく
ご主人さまの帰還を
仏間の畳がほんのりと温む

もう喉をとる食べ物はない
頬が険しい山のように尖り
眼窩は深く白い目脂が固まり
面影をさがす僕に
内臓のにおいが吹きかかる
乾いた唇がわずかに動く

下の汚水がしみついた下着が
僕を呼ぶ 細木の手をふり
かすれた 母ではない声が
すみませのう すみません
他人様の僕がいるらしい
白い下毛がうっすら蛍光灯に光る

朝がまだやつてこない台所
寝たきりの母が立っている
今日は遠足だよね
数えきれないご飯粒が
手にも寝まきにもこびりつく
にぎりめしを作ろうとしたのだ

ひと粒ずつ口に入れる
母を照らす朝が窓のそばまで

にぎりめしの具は紅い光
にぎる手から零れ落ちてゆく
過去分詞たちの落葉
僕は母の手をかく固く握る

母の乳房のにおいが残る
鼻腔の記憶がまだ僕にある
ほどけたにぎりめしにも
少しずつ崩れてゆく母に
自らの命をしっかりと結ぶ力はない

ゆっくりひと粒ずつ
残されたときを噛みあわせる
僕は母のかすかな寝息から
河のせせらぎが聞えてきた
すべてのものを流してしまおう
この世は一時の岸边なのだから

途惑い

春のそよ風に
抱きあげた孫の胸に
知らなかった紅葉色の痣

よじれた笑いに
へなへな震える
あなたの唇
何を恐れ怖がっているのか
そつと孫を草むらに
あなたの胸にも赤痣
鱗を剥ぎ落とすように
滲み出る血の痛み
隠しておきたい後ろめたさから
潜めてしまふ心のかわき
薄い殻はしだいに厚くなる
母の胸に痣はあつたのか
頭をおしつけ吸つた母乳の
おぼろげな記憶を問ひ質しても
小さく萎んだときは
かたくなに拒みも頷きもせず
白内障を患つてしまふ
父の胸には
娘には 息子は
ゴマ粒ほどの痣にひそむ
あざけりの陰
暗い道から聞えてくる
ざわめきの声
あなたは耳をふさぐ

目を閉じる
わずかばかりの差違に
かつての苦しみが蘇る
こんな痣ぐらい
優しそうなやすらぎを誘う
いつときの同情
そこに棲む魑魅魍魎
忘れなさい
少女だったあなたは頷く
からだの中を巡つた屈辱
孫は若葉にほほえむ
どんなことばを覚え
どれほどの同情をもらい
心から潮騒は消えないが
あなたはオムツを換える
汚れたものは洗えばいい
いくども いくども
ごしごし自らの手で
青空へ飛翔したそうに
風にはためく洗濯されたものたち
孫に頬ずりする
あなたはゆつくり深呼吸をする

直訴

級長になれたのに
十二歳の悔しさが
七十五歳で亡くなるまで
永遠の批判者として
その男の想いは 生まれた
岐阜県稲葉郡黒野村に辿り着く

棲みやの窓から日々を見つめるのは
自然に従う長良川の流れ
遠いときが蜉蝣のごとく
川面を渡っては小波にしずむ
夕陽の中に揺れる鵜飼舟の群
激しく燃える篝火に
白く濁った瞳の裏がむず痒い

九十年前の十一月十九日
最上等の軍服を着た騎兵の前へ
人間としての熱と光を求め
その男は走った 走った
直訴下！ 直訴！
白い馬上から一瞥する
わかい現人神が戸惑う

アリヤカマキリにも似た
黒い眼球が異様に飛び出した
一匹の赤子 赤子
その男は砂塵の中の馬糞に塗れ
暗い監獄でひとり初めて
肺臓や心臓と語り合った

どんな思想をもって
どんな宿命をだいて
故郷の地へと終息していったのか
表層を語る活字たちが
その男の古びた書齋を
蛆虫のように這いずる
改悛などありえるものか
いくども繰り返すつぶやき

あの奉書紙はどこだ
人の宿根にすくむ
穢れを忌み嫌う亡霊がいまだ
あなたはあなたを隠してはいけない
あの男が残したのは

早乙女れん

或る坊さんの言葉

或る坊さんが言っていた
「新しい命を送り込むことは罪だ」って
その言葉がじわりじわりと私の中に浸潤する
生物としては失格か
人間はそう単純ではない
ただ子孫を残すためなら
苦しみや悦びを味わう必要がない
我々は感情をもつ
そしてそれらを抑える理性をもつ
だから素晴らしい
だから味わい深いんだ
私は坊さんの言葉に賛同する
私は母になる自信がないの
だからこんな軀なんだ
どうとう私の心臓にまで達した坊さんの言葉
傷口をえぐりながら私を蝕み

消えない傷跡を残そうとする
「新しい命を送り込むことは罪」
もうわかったから・・・
私の生き方は決まったような気がした

乱心

恋に狂っていいですか？
狂ったことないから時々狂いたくなる
今してる恋は少し危険だけど
なんだか捧げてみたい気がする
火傷したっていいから
歯止めのきかない恋に溺れて
全部脱ぎ捨てて裸になってみたい
彼人は受け止めてくれるかしら
体には自信ないけど心には自信あるの
だからお願い相手して
狂った私に優しくして

未明

愛人を愛しちゃいけないの？
同時に二人の人を愛しちゃいけないの？

増えた分薄まるものでもないのよ
私にとってこれは浮気心じゃない
どちらだって真剣なの
そしてまったく別物だわ
平行した線と線はどこまでいっても交わらないでしょ
う

そんなものよ

だから悪いことをしているとは思わない
だって二人でいるとき心は通じ合っているのよ

私たちはたしかに幸福なんだから

それ以上に何があるっていうの？

私はどちらも愛してる

他人に理解されなくてもいい

物質的な証拠がなくてもいい

私にもらってる愛と

私実践してる愛は本物なんだから

酒

お酒 お酒

酔いたい

酔って素の自分になって

思い切り歌いたい

それをあなたに聞いてもらって
乱れた私を優しく見守って
でもね

お酒の力を借りないと

ちよつと勇気が足りないの

意気地なしって言われても

仕方ないことだわ

それが私なんだから

お酒 お酒

酔いたい

酔ってもつと大胆になって

あなたの胸に飛び込みたい

これ以上近づけないくらいくっついて

あなたの鼓動を感じたい

でもね

お酒の力を借りないと

ちよつと勇気が足りないの

臆病って言われても

仕方ないことだわ

それが私なんだから

お酒 お酒

酔いたい

酔って最後は真剣になつて
あなたに想いを伝えたい
どれだけ愛してゐるかつてことを
でもね

お酒の力を借りないと
ちよつと勇気が足りないの
でも何て言われようと
私は本気で愛してゐる

私の中の女

人を癒すのは人
もし貴方が待つていたのなら
それが一途なものならば
私が暖めてあげましょう
心を癒すのは心
もし貴方の悲しみが本当なら
その孤独が本物なら
私が慰めてあげましょう
だから気持ちを楽しにして
体の力を抜いて
そして目を閉じて・・・

貴方の人生に彩りを
その晩年に悦びを
そしてささやかながら小さな花を

私の美学

どうでもいいことをよくしゃべる人はキラライ
せかせかして心に余裕のない人もキラライ
女なら誰とでもセックスしたがる人もキラライ
品のない人はキラライなの
そう思うから
私はポツリポツリとしか話さない
ちよつとしたことでは慌てない
そう簡単には男と寝ない
だつて欲にまみれたくないの
私は美しくいたいなのよ
誇りだつて捨てたくないわ
私は自分の価値を磨いて
弱くてもいいから輝かせたいの
だけどわかつてるのよ
私はいつだつて覚悟はできてるわ
人間がそんなにキレイでいられないことを私は知って
るの

だからその時が来たら
私は欲と感情に身を任せて
全て捧げるわ
今を失うことは全然怖くない
だって欲を抑えてきた私は
大して何も持っていないのだから

小説との出会い

彼人との出逢い
彼人と過ごす時間
そして彼人と離れてる時間までもが
まるで小説の世界なの
この物語をだれが書いているのか知らないけど
主人公を演じるのは悪い気分じゃないわ
むしろ愉快がってる自分がいて
新たな自分に驚いているの
小説といえば早く次が読みたくなるものでしょう
まるで今の私の感覚そのものだから
そして物語には必ず終わりがある
だからどうしても結末が気になるの
でも物語はまだ始まったばかりだし
どうせなら中編くらいがいいわ

どちらにせよ結末を迎えるにはまだ早いから
その間に私がすることは
それがいかなる最後であっても
甘んじて受け容れる心の準備を
いつでもしておくことだと思っ
今いえるのはそれだけ

不倫

流れに身を任せ
貴方についていく
どこに案内してくれるの？
そんなことどうでもいい
まるで奥様気取りで 貴方と手を繋いで歩く
その一歩一歩がこそばゆい
狭い小径は肩が触れ合う
わざとの時もあるんだって
それは私だけの秘密
私の好きな甘え方だから
すれ違う人々の視線
なんでこつちを見るの？
連想しながら 気の済むまで見ればいい
ロマンスグレーの貴方と私

陶醉感に浸って歩く
ふたりの舞台は京の都

京都 ぼんと町

ほろ酔いで歩く 京都ぼんと町
もう少し飲みたいなどの店で酔おうか
美味しいカクテル飲みたいの
そしてぐでんぐでんに酔わせて
道行く人々 みんな酒と肴を求めている
日常はここには入れない
イタナイ関係も ここでは許される
細い路地が私たちを誘い込んで
奥に潜む官能を刺激する
もし人気がなかったらそこで接吻(キス)して
町にも酒にも酔う ここは京都ぼんと町

落柿舎

小さな庵
季節が詰まったお庭
自然に寄り添う暮らし

こんなところに住んでみたいな
四畳ほどの部屋からは
春の萌ゆる草花が見え
風が春の匂いを運ぶ
大して話すこともなく
大して気にすることもなく
ただそこに座って
あけ暮らしてみたい

龍安寺 石庭

静
求めていない
何も訴えてこない
完
何も言わせない
狂い一つない
座
ただそこにある
ただ無だけがある
鋭
研ぎすまされている
心地よさがある

極
極めている
己を極めている

人を超越した自然
過去も現在も未来までもが
もはや無意味

マンハッタン

私を口説いてくる
トロツとした琥珀色の液体
まるで首筋にキスされているような
耳元で甘い言葉を囁かれているような
警戒が解かれていく私の体
覚えず吐息が漏れて
唇が唇を求める
もつと口説いて
今夜は帰さないで
そして私を滅茶苦茶にして

悔しくない
アナタの勝ちよ

移るひ

色づく庭のアジサイ
純白で生まれた花びらが
近頃うつすらとほお紅をさしている
恋してるのかな
その可憐な佇まいはどこか犯し難く
私は離れて見守った

そんなおなごが
今日は唇を真赤に染めている
誘われるまま
大人になった女に近づいてそつと眺めてみたら
いつしか洗練されていた美しさにはつと息を呑んだ

末永卓哉

破壊

殴り倒すよ、拳血に染めるくらい
女々しいと、嫌になる僕の未練
ひび割れた窓ガラスが痛く
月が隙間から照らす僕の横顔を

おくりもの

天命を侮辱したのは貴様らだ
憎悪と殺意込めた黒いバラを
贈りつけてやろう

幸運

良かったな 俺が筋ジスで
じゃなきや 煉瓦で頭殴り
お前殺されていたよ
それほどのことしているよ

省エネ

少しの不都合で怒らず

ココロは平穩にいこう
無駄な時間は節約する
今年はそんな私になる

ドライブしていると
窓から広がる草原に
風車が回る風景みる

眠る前に

目には聞しくない 光はなくなつて
信用する意味をなくす
耳には雑しくない 音は歪みだして
ホントのコエをすてる

私はライトスタンドの灯りで
人間失格のページをめくる
明日は休みと夜更かして

リンゴの玉林

あなたにときめいて
感じる酸っぱい風味
僕は青い心余して
齧る学校屋上の昼

リンゴの以外

皮の方がいらしい
実よりも栄養が
外見よりも中のある
僕は人になりたい

さっと洗い替る
公園のベンチで
夕陽に顔を染める中

自由になれるとき

私はボエムやアートの
空間では暴力や理想も
好きに創られるから
病や社会の閉塞はない

今日は腕と肺の調子
雪もなく心地良い日
ふう何か小言を
世界に語ろうかな

レキレキは

生きるの一番で 死ぬことは最悪だと
今の常識はいうが 抜け殻のままになり

管の鎖に囚われて 生かされることなど
いいといえますか

筋ジスの一人として 大半はベッド生活
送り危惧しているよ

月と星の灯りを
カーテンの隙間から 照らされ眠れない
夜に医学の過渡な進歩を

雨宿りにて

アワレ アワレ アワレと 屋根に雨は眩く
バス停で濡れたくない 女々しい理由と
ときを嗜むために待つ ベンチに座り込み
キボウ キボウ キボウと 太陽は語りだす

赤の意味

赤は人のいのちを表し
争う汚れた血の色ではない
あなたの掲げる理想の旗は
密かに応援しよう

薄暗いバーのカウンター
マルクスの資本論を捲り

ブルーチーズつまみながら
赤ワインを揺らすよ

複雑な課題

吐き気が止まらない
労働者を牛耳る経営者
経営者を脅す労働者に
工場の排水が注ぐ池の
匂いに似ていて

僕は強者の横暴も
僕は弱者の言い訳も
許せないのですよ
一人で菓子パンと
缶コーヒーする

不快なメディアの
盛られたリアル
風味を流したくて
明るい光と薄いジャズ
彩る殺風景なリビングで

うはこびす
ダークマターみたいな

色してうまいよね
希望の色した白米
ホカホカナぬくもりに

今日の朝は照れ屋さん
でも構いませんよ
平和に家族とテーブル
向き合い茶碗持てたら

夕飯のたくあん

かりこりとかりこりと
そのはごたえおんは
こうふくとこうふくと
ささやきにきこえたよ
ぼくのころはげんき
なんだとごはんを
みそしるくちにいれる
さんがつはじめのよ

風の便り

砂漠の流れ者が歩き
祖国もなくなる現実に
泣いた言葉を拾う

貧困の若き者が探す
パンとミルクに希望を
求める渴望が届く

それは風の果たした
与えられた天命だ
私はその囁きを聞き

申し訳ございませんが
今の日本でよかったですと
窓からの風感じ思う

弁当箱フアンタジー

太陽みたいな梅干しに
白米は雲みたいになり
草原みたいなほうれん草
卵焼きは砂丘みたいになり
たこさんみたいなウインナー
岩石みたいな鶏の唐揚げに
赤いトマトの宝石に林檎の兎
なんて妄想しながら初夏の公園

微笑む太陽と君の横顔感じて
弁当箱を広げたなら
そんな休日すごせたら
幸せになる

平和こそ

温かいご飯と味噌汁
家族と笑いテレビ
女の人はオシヤレ
男の人はスポーツする

国のために尽くすと
侵略戦争してまで
自由な意思放棄するなら
ボケてしまう平和がいい

私はこの病床でいつも
詩を語るのだからと
花瓶のヒマワリに笑う
平和は幸せだよと

夜に

真夜中の河原で
目の前にある小石

放り込んだら暗闇
僕と水面が揺れる

ゴミクズと

酒と賭博に溺れて
子供を殴るクズ親
愛と見栄に侵され
教師に要求する馬鹿親

そんなのがいるから
まともなことをする親も
白い目で批難される
偏った野蛮なマスコミに

エゴと悪に飲み込まれて
障がい者の虐殺するきちがい
愛と支配欲に取り込まれて
アイドルを刺しまくる変態

そんなのがいるから
モラルあるファンも
軽蔑の態度にあうよ
偏った理解の空気に

少数の悪人に神の裁きを
多数の善人に神のご加護
月に照らされる桜前に願う

みなもと

黒い工場の排水が流れます
心の蛇口を本音で捻れば
人の魂が不快になる臭いさせ
私の不快を源にさせて

無色な原発の放射能出ます
心の負荷が強く掛ければ
人の意思が誤解に蝕ませ
私の憤怒をきっかけにして

私は歪みの黒いものを
抱え込み生きています
死にたいと呼吸器で
薬品の空気が吸い込む

私の存在には腫瘍みたいな苦痛を

私の存在には腫瘍みたいな苦痛を
抱え込みながらも汚れた街並みを
生きています。

成功者の輝きに壊したくなくなり
ダイヤモンドに拳をぶつけて
失敗者の哀れに吐きそうになり
錆びたごみ箱蹴りながらも

私の存在には腫瘍みたいな苦痛を
抱え込みながらも汚れた街並みを
生きています。

権力者の恐怖に支配されていき
彼らの論理にいいなりに
労働者の墮落に染まりゆき
彼らの行為を見習っていた

私はそんな哀れなところで
私はそんな無様なひとたち
嫌気がさしながらも生きる
薬品匂う病室のベッドにて

時計の喪失

ガシャン！と壁から
時空の欠片が落ちる
私は今、時から外れた

リビングでワインを飲む

訳あり商品

零れるビール
砕け散るガラス
焦げてきた人参
捨てると思えば

悲しいかな
もったいないと
ゴミ箱に
放り込んだ

カステラ

お茶にしよう
僕と兄にカステラ
祖母が茶の間に
その記憶は今の夢

入浴剤

丸い個体を落とす
浴槽の空間が泡
。〇〇とさせた
私のこころも

浴槽につかる

テレビとは

患者は弱いから
性善説といい
専門職は強いから
性悪説という

偏見と冒涇の黒
染められたテレビ
吐き気しそうになり
私はコーヒーで流す

一人焼肉

ムカつく記憶の苦み
ピーマンと焼いてさ
微笑む記憶の甘み
カルビも焼いて
私は明日の希望
得るためにご飯
大盛り食べるよ

きゅうりの糠漬

カリッと齧れば
心地よくなるよ
少し暑い部屋の中
箸でつかみ口の中

井戸へ

小石を上から落とす
水面が大きく揺れる
僕は何か揺さぶられる

怨念か、憎悪か、わからない
黒い影みたくない奴に飲まれ
私は眠れない夜の刹那と空間
ただ浮かんでいる、ただ単にね
ベッドで私は鬼になりそうです

核兵器

あなたへの怒りを燃料に
嫌悪感を核に搭載してさ
あなたとある仲間も殺す
ミサイル発射してやるよ

軋む腕の発射台で組み立てる

言葉の部品と思いの燃料を
メール送信で私は飛ばすよ
これがあなたへの復讐だ

紙飛行機

残念ながらという
不採用通知の紙を
飛行機にして飛ばす
公園で青空みながら

タコの握り

お前はエイリアンなのかと一つ

鬼

目にうつるもの全てを刃物で襲う

ゾンビ

理性と体のまとまらない私は

深海魚

私の心もこんな感じかな

息子の部屋

母さんバッグに隠した血塗れ包丁みたの

確認

君のスマホみたら知らない男の名前が

ほうれん草のお浸し

軽く宮城県ひとめぼれ口にし
小鉢に入ってお膳に運ばれた
祖母が作ったお浸し食べている
少し懐かしさに喜び遺伝子茶の間

タコの握り

おい我が息子よそんなに
蛸、蛸、蛸とレーンから皿を
エイリアンになるよという
休日のロードサイド回転寿司屋

ライオン

六月第二土曜日に動物園へ
娘を引き連れた妻と私はいら
檻の向かい側勇ましい姿みて
カッコいいなどはしゃぐ娘よ

お粥は水っぽい味気無さ
おかずは正体不明の形で

僕は今日命に栄養をえる
介護士や看護師に支えられ

呼吸さえも機械化される
仕事さえも詩を紡ぐ満足
喜びは楽天イーグルスの
野球チームの完全勝利だけ

権利は無様と不条理の狭間
生きたいと頼んでないのに
生き地獄で

先月の野球中継

引き分けしか狙えない延長試合
筋ジストロフィーと僕は闘うよ
昨日は仙台市内の病床から夜
楽天対ロッテの試合見てそう思う

不幸から雇用

白衣の天使が羽ばたけるのは
私のような患者の不幸があるから
そんな皮肉を天使への妬みと共に
真っ暗な病室で眠れず叫ぶ

塚本正治

おばあちゃんの唇

僕はおばあちゃん子だった
おばあちゃんの背中であんなに育った
おばあちゃんと同じ布団に寝て
おばあちゃんと一緒に食事をした
幼稚園のお遊戯もおばあちゃんに
誉められたくてがんばった

小さい頃僕は身体が弱く
よく四〇度近い熱を出した
その時 おばあちゃんは口移しで
おかずを与えてくれた
そしてたぐさんの水も与えてくれた
だから僕は おばあちゃんの唇が大好きだった
おばあちゃんは飴ちゃんをなめては
僕に口移ししてくれた
それはまるで恋人と口づけをしているようで

僕のちんちんは固くなっていた

おばあちゃんは大空襲の話をよくしてくれた

B29から焼夷弾が振り撒かれ

辺り一面火の海 一家で防空壕に逃げた

「熱い、熱い」「水をください」と唸りながら亡くなっ
ていく人を

たくさん見たと言う

死んだ子どもをバケツに入れて フラフラ歩いている

お母さんを見たと言った

防空壕の中で 飴ちゃんをなめて耐えた

「もう戦争はこりごりや」

「戦争しない憲法を大事にしいや」と教えてくれた

幼かった僕にとって

おばあちゃんの唇が言う「戦争」と「憲法」は

とても衝撃的なものだった

中学生になっても おばあちゃんと同じ布団で寝た

寒い夜 おばあちゃんの背中のぬくもりはコタツ代わ

りだった

受験勉強に疲れ 床に就くと そばにおばあちゃんの

寝顔があった

ふっくらとしたおばあちゃんの唇に小指で触れてみる

と

その唇は潤っていて 受験戦争に疲れた僕の心を癒してくれた

そして中学三年の時「正治 大切な話がある」と

おばあちゃんの唇は僕に告げた

おばあちゃんはとても緊張しながら

涙声で「実は私はおまえのほんまのおばあちゃんと違う」と

僕と血のつながりはないことを僕に伝えた

僕は恋人から別離を告げられたように「おばあちゃんは僕のおばあちゃんや」と言っ

泣いて胸の中に飛び込んで行った 無我夢中に飛び込んで行った

だから 僕はおばあちゃんとおばあちゃんの唇を否定するものを拒む

二〇一四年七月一日

時の政府が 集団的自衛権の行使容認を

国民不在の密室の中で決定したことを否定する

安保法制を否定し

憲法九条の改定を否定する

そしておばあちゃんの唇が語ってくれた戦争をしない憲法を肯定する

だっておばあちゃんの唇は 僕の故郷だから

蛭間慶美

矛盾に揉まれながら

「疲れた……」

私の体が悲鳴をあげた。

痛む腰を擦りながら、テレビをつけた。

娯楽が呼んだ情報過多が、うるさい。

ありがた迷惑なテロップに、目が追いつかない。

便利になった世の中が、私に教えた事は人の心の不便さだ。幸せになりたいと願う人が、願えば願うほどに、貧しいことに気づく不幸を薄々感じている。

刑務所を囲む高い塀が、どんなに高くたって、罪人が笑い、罪のない病人が病室で泣いていて、死刑囚が死刑執行の日になって、真面目に生きる人々が、溜め息をついて履く革靴に自らの死を願い揺れてしまう心を、そっと隠した今日がある。

矛盾しかない、矛盾しかない。

生きたいと叫び、死にたいと叫ぶ人々の狭間、揺れる私の心が願う人々の幸福が、どこまで届くのか知りたい。

余力を持って余している私がどれだけの矛盾を許せるのか知りたい。

そして、気付いた答えがこれだ。

今あるものが心を満たして、喜びの涙を流しても、それでも、それでも、人々が蓋をしたがるものに、真摯に向き合うのが、私の使命ではないか。

即興で書いた詩

「感受性」が、敵だったけど、今じゃ、最大の味方。

だけど、未だに「仲良く」は、なれない。

君は君の正常があるなら、私の正常を突き通そう。

辛いや、悲しいや、悔しいや…

の負の感情をエネルギーにしたら、

「無敵」が生まれるのかと思って、

鋭い眼光を「挑戦」に向けた

世界レベルで異常なら、自分だけでも信じるしかないじゃない。ピンチは、楽勝で越えた。

なぜかって？

「一人じゃなかったから」

確かに、私が生まれ育った東京は、どこにでも人がいる。隠れて泣ける場所がない。それが、嫌だったし、嫌だ。

だけど、思い出すシーンには、いつだって人がいた。

しかも、幸せなシーンに。

馬鹿な私に教えた「間違いたち」こそが、私の糧になってるよ。

これが、即興で書いたノンフィクションの台本だよ。でもね、

「これは、私の台本であり、君の台本には書いてない」

ただ、私の台本と君の台本は、

ニュアンスが違えども、

「愛」が、書かれているといいな。

愛情GPS

悪い口を利用してしまった。

大人気ないヒステリック

止まらなかつた。

どうしてこんな意地悪が言えちゃうの
大切な心を刺してしまった。

何度も、何度も。

謝る言葉がチラついてても

どんどん嫌われていくことをわかっているでも止まらないのどうしてヒステリックになる

もうすでに、さっきの自分が気持ち悪いの
恥ずかしさに、とどめを刺したいの
それさえもう、自分が可愛い心だって
最悪だ

悪い口を叩くのは疲れる
呪えば、魂すら奪われる
屍になってしまふ過程を
声を上げて、拳を上げて
自らの人間の皮を剥ぎながら
永遠に抜け出せぬかも知れぬ、迷路に迷い込む。

可哀想に。
あんた、醜いよ。
また、終わらぬ自問自答するんだね。
生まれる言葉が、宝物を壊す凶器
一番先に逃げる準備をしてるんだ。

上手な争いが出来ないの
素直に、ケンカして
素直に、仲良くなつて、
また、ケンカして、
仲直りが出来ないの。

人を嫌ったり、恨んだりするのって
疲れるもの。

最低な気分だよ、笑ってくれる？
そのほうが楽なの。散々、人を傷つけたら
自分が傷つきたくないから、先に逃げた。

逃げて、逃げて、逃げて
息を切らして着いた先
なんにも楽しくない。
そこは、冷たいテーマパーク。

自分を見失いそうだ。

畜生！！

帰りたい：
ごめんなさい、ごめんなさい
違う、私じゃない
違う、こんなの私じゃない
私には、愛する人がいる
すぐに抱き締められる人がいる
この愛情壊さないで
だから、だから、邪魔しないでくれ

頑固ものを許して。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…

やさしい風に

洗濯物が揺れて

隣に丸まり眠る旦那さん

いつだって少年のような

あどけないその寝顔

感謝の涙がとまらなくて”

メールの下書きに保存してあったの

いつか書いた詩。旦那さんに、書いた詩。

この時の私は、どこにいるの？

この心は、どこにいつちやっただの？

もう一回、探してみようかな。

もう一層、消えてしまおうか。

もう一度、抱きしめてみよう。

なんて、我俣なの。

いつだって悪いの。自分自身なんだ

わかってる、優しいあなたに当たってしまう

だって、なにも抵抗しない

幼稚な私は、大人なあなたに甘えている

もうわかっているよ、もうわかっているよ…

あなたはあなたは私を探してる

私も勝手にあなたを求めている。

ドロっとした黒いなかか、心をつたって落ちていく

感覚…

何回、喧嘩したって

何回だって、仲直りできちゃう

その繰り返し、その繰り返しで

築いた愛情。その繰り返しで、

気づいた、繋がっている確かな愛情。

帰ってもいいですか…

こんな奴、許してくれませんか…

どこにも行かない。ちがう、

どこにも行けない。A.S.A.P

どうせ、帰ったら黙って抱きしめて泣く

わたしを、あなたはすでに知っている

悔しいけど、なんだか嬉しい。

「ごめんなさい」とか「だいすき」が言えそうもないから、帰ったらすぐ抱きしめよう。

「二人の愛情のゆり」がある

私の心のカーナビの履歴が

「あなた」だけで、溢れていた。

抱きしめよう

「愛ってなに？」と、心を痛めた女の子をただ、抱きしめた。

口ごもってしまったから、ただ、抱きしめた。そしたらその子、泣きだした。

「こういう事だよ」って、抱きしめた。わからないけど、こういう事じゃない？

悪い気は、しないでしょ？

スキンシップが、足りないんだ。

触れ合うことが、足りないんだ。

温もりが足りないこと、気づいてあげて。

握手して抱きしめて

足りない ふれあい

気づいてあげて：

そして、気づいて

きつと、こんがらがった糸は

わりと容易く解けるもので

難しく考えることは

「優しい」から始まった

忙しい君と

傍観している スロースターター

時間は優しく時に厳しく

私達を急かせるんだ

動く秒針と、動かぬ私

朝が来る度に悲しくなる

忘れたい時間なんて、気にしたくない

すべて忘れていたい

君が帰るまで、抜け殻の気分さ

時間と仲がいい、君と仲良くなりたい
忙しい君と、もっと仲良くなりたい
朝が来ても、時間が来ても、行かないで
もっと、話したい。ずっと話したい。
仲良くしたい、君とは仲良くなれない。

すべてのものが、前へ
私を置いて、前へ、前へ
たまに、私の肩にぶつかって
たまに、私を傷つけても
止まらぬ速さで 前へ、前へ

悩める時間と、悩める場所がある事が幸せ
涙を拭う、君の手の温かさを探している
時間は優しく、君と私を繋いでいる
時間と仲がいい君と、仲良くなりたい
忙しい君と、もっと仲良くなりたい

目まぐるしく変わる日々の中で
時間よりも先に、君を独り占めしたい。

時間は優しいものだ、私は早く知りたいんだ。
君を許すための手立てがなくて、
君の知らぬ間に時間に身を任せた。

目まぐるしく変わる日々の中で、
時間よりも先に、君を独り占めしたい。

みかん

いつもの散歩道

空気の中に見えない魔法の絨毯が飛んでいる

風を起こして砂を散らして

草は葉と葉の間を風が通りぬけ、

まるでシャンブーしたあと髪をかわかして、クシでといてもらっているよう

散歩している私は一人

空から見れば農道の道にポツンと見えるゴマツブのよう

ぐいっと風が背なか押す

空を見ると、オオカミみたいに、「おおくん」って吠えたくなくなった

私の中の野生に、ちらちらまだ残り火が灯ってる

宮下栞子

降る月

窓一面の大きな月が
たった独りの私を見ていた
こちら側には光が当たり
あちら側には闇がある

外から聞こえる雲音に
明日はきつと雪ですと
誰かの音が脳に響いた

Meeting you is a miracle

冬に染まった晩秋の
夜風は少しやわらかに
子供のように駆けてゆく

赤い手を温めながら

私は一人月を見上げる

丸く大きく金色の

——周りの星には眩しすぎた

月に背を向け光を消した

雪の音が落ちていく

近岡 礼

沈丁花

沈丁花の匂いがする
昼の路地に
夜の散歩道に

それで

長生きしてよかったとおもうのだ

匂いだけがのこり
また去ってゆくのかもしれない
いつものように

夜桜

月がかがやいて

円陣を描いて広場に桜が咲いていて
人々は愛でている

初めて

秘めるものがあれば秘めることばがあることを知って
コートの手をたて
ぬくもりを内にいだきながら
人々とすれちがう

リルケの薔薇

先輩は私にリルケの薔薇の詩を書いた
色紙をかけてみると
薔薇は真っ赤にいろづいた

先輩は死に

薔薇は移動して

ふたたびよみがえり

芳醇な日本酒の香りのなかで

襷は地層をなしていた

高速バス

この山あいはまだ桜が残っていて
この前あるいた夜が思い出される

その夜

暗いジャズの店で酔うのは
いまだにわからない仕草
だから私はできるだけ強い口調で
攪乱してみるのが
ことごとくのみ込まれてゆくので
あなたはいつか人生を引っ掻いた

溪流は青い

トンネルの多い高速道
点在する黒瓦の民家
桜が窓にぶつかるように近づいてきて
何度も逢えるのです

知の美

黙っている存在
知的なものは

ことばのしずまった底にたゆたい
それ以外の

色や形や声などはいらなくて
闇に消えそうで消えないはざまにあり
私はそれだけを信じて
永遠に行く末をともにしてゆきたいと
そこだけを切り取って
生きてゆきたいと

美は生命の究極のこだわり
闇のなかに生まれたため息のような艶
それを忘れてはいけないのだ

八重桜

桜貝のように八重桜が散り敷いて
踏んでゆく山頂から

蛇行する川

きらめく夜景――

手のぬくもり

どこからがいたずらで

どこまでがことばなのか――

賭けてしまった以上

見つめあうしかない

けれどどこでもまた

私は私であって私ではなく

空虚なものが堰をきってなだれてきた結果なので

きつと私の墓碑銘には

〈罪をもてあそんだ者〉

と刻まれ

枯葉のなかの無縁墓となる

闇を這う八重桜のはなびらは

幻覚の無縁墓を覆い

いのちあるものたちを

祝ってくれる

運命論者

詩は女のもののなのか

肉体を通して語ることの下手な男は

ことばが浮いている

しよせん女には勝てないもの……

私の肉体

痙攣から痙攣への綱渡り

心臓によって世界を分断しようとし

ものごとがあわい（間）にあることにきづかない

愛に執心しながら

捨て身にもなれず

風と甕の小さな町に通い

庵となる

いつまでも循環しているだけ

循環は年とともに疾走し

乾燥し

空に舞い上がる日

思ふだと思ふのだ
幸も不幸も決定されている
上手く もがけ
夏の花は白い

日々是新

怒ることを忘れて
私は人間から遠ざかった
けれど梅雨がおのずと怒気をふくんできたので
私は紫陽花の首を切った
そして祈った

祈りも欺瞞だった
私は今日の私でありたい
昨日の私を引きずって仮面をかぶるつもりか
おお 繊細に色づいて万物が近づいてくる
運命は緻密な策略で追いたてるから
私は笹船

風と波にたゆたい
翻弄をたのしむ

老人

掃き清められた広い神社の一隅に
カフエがあり
私は通っている
今日は鳥居に縁どられた景色のなかを
老人がとぼとぼ歩いている
あれは私だ
入らずの森に迷い込んで
夢精するのだろう

「金澤詩人」第 13 号
2017 年 7 月 10 日発行
金澤詩人倶楽部 (代表近岡礼)
金沢市元菊町 13-11-201
TEL090-3298-1682
<http://bach2.sakura.ne.jp>
onibas@giga.ocn.ne.jp